

# 大学生の発達障害の症状とうつ症状の関連性

吉本好延<sup>\*,1)</sup>、濱岡克侗<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>大阪行岡医療大学

## 【目的】

本研究の目的は、発達障害の症状の中でも自閉症スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) に着目し、ASD とうつ症状の関連性を明らかにすることであった。

## 【方法】

対象は、18歳以上の大学生 104 名 (男性 65 名、女性 39 名) であった。ASD の評価は日本語版自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient: AQ) を用いた。AQ は、50 項目の質問に対して 4 段階のリッカートスケールで回答する自己記入式の評価であり (社会的スキル・注意の切り替え・細部への注意・コミュニケーション・想像力)、合計点数が 27-32 点/50 点が ASD の傾向がある、33 点以上/50 点を ASD と診断される可能性があるかと判断した。うつ症状の評価は自己評価抑うつ尺度 (Self-rating Depression Scale: SDS) を用いた。SDS は、20 項目の質問に対して 4 段階のリッカートスケールで回答する自己記入式の評価であり、合計点数 (20-80 点) が 40-47 点を軽度、48-55 点を中等度、56 点以上を重度と判断した。

統計解析は、ASD とうつ症状の有病率をそれぞれ示した。また、AQ と SDS の関連性の検討には Spearman の順位相関係数を用い、有意水準を 5% とした。

## 【結果】

AQ の合計点数の平均値は  $20.3 \pm 8.1$  点であり、ASD の有病率は AQ で 27-32 点が 15 名 (14.4%)、33 点以上が 1 名 (1.0%) であった。SDS の合計点数の平均値は  $40.0 \pm 18.4$  点であり、うつ症状の有病率は軽度 33 名 (31.7%)、中等度 22 名 (21.2%)、重度 2 名 (1.9%) であった。

AQ と SDS には有意な正の相関関係を認め、相関係数は 0.379 であった ( $p < 0.05$ )。

## 【考察】

本結果から、ASD 傾向のある大学生はうつ症状傾向があることが明らかになり、成人を対象にした先行研究と同様の結果が得られたことから、本結果は妥当であると考えられた。

## 【倫理審査および利益相反】

本研究は聖隷クリストファー大学の倫理審査委で承認を得た。利益相反はない。

【学会発表】 なし

【論文発表の状況】 なし

倫理審査	■承認番号 ( 23017 ) □該当しない
利益相反	■なし □あり ( )